

はな きこふんぐん はな き
花の木古墳群・花の木遺跡 (本発掘調査B)

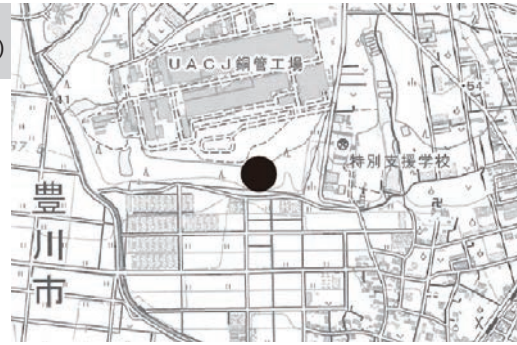
所在地 豊川市大木町地内
(北緯34度51分32秒 東経137度24分41秒)

調査理由 一般国道151号(一宮バイパス)

調査期間 令和2年5月～令和3年3月

調査面積 5,510㎡

担当者 池本正明・早野浩二・社本有弥

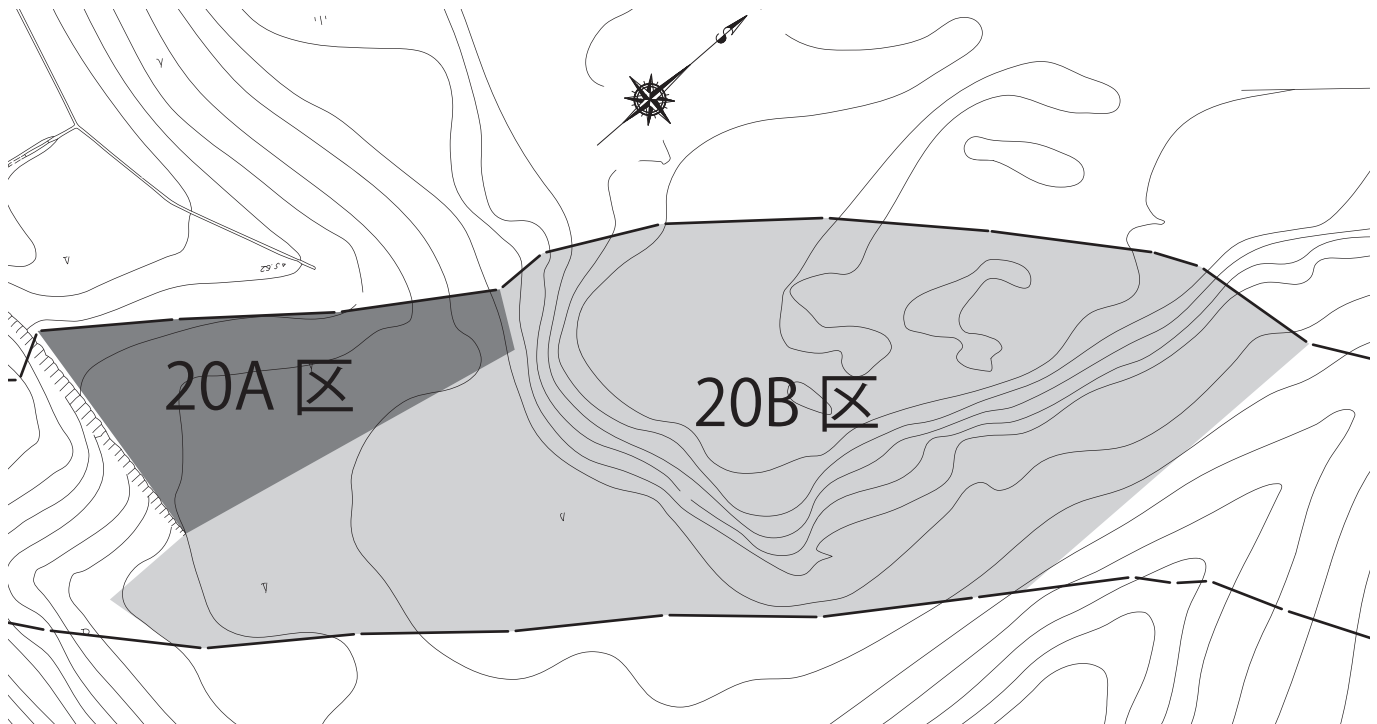


調査地点 (1/2.5万「新城」)

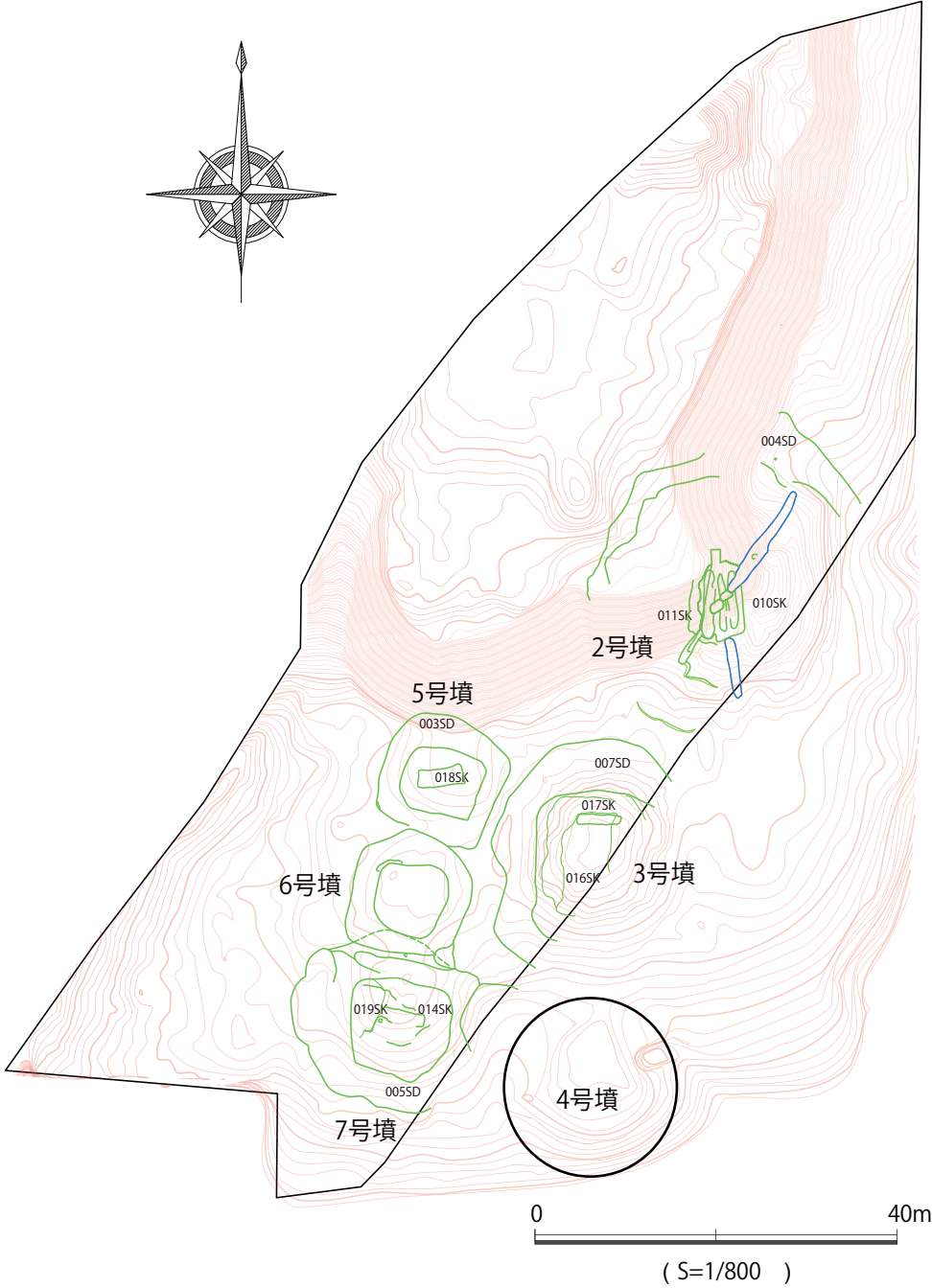
調査の経過 発掘調査は道路改良工事(一般国道151号一宮バイパス)に伴う事前調査として、東三河建設事務所道路整備課から愛知県県民文化局を通じた委託を受けて実施した。同事業に伴い、平成30年には愛知県埋蔵文化財調査センターが確認調査、令和元年には愛知県埋蔵文化財センターが本発掘調査Aを実施している。

立地と環境 花の木古墳群・花の木遺跡は本宮山麓から広がる扇状地の末端、西原台地の縁辺に立地する。周辺には鍬水B遺跡、宝陵高校遺跡等、弥生時代の遺跡が数多く分布する。古墳群は7基の古墳が登録されている。2号墳は昭和43年に工場建設に伴って久永春男氏によって緊急調査された。平成9年には工場拡張に伴って旧一宮町教育委員会が確認調査を実施している。

調査の概要 今年度の発掘調査では調査区内の客土を除去するため、調査区南西を先行して調査した。調査前地形測量の結果、古墳は調査区内に5基分布することが想定された。2号墳は昭和43年時の調査状況の記録と墳丘の調査を実施した。3号墳、5号墳、6号墳、7号墳は墳丘と周溝の調査を実施した。古墳群の下層では弥生時代中期から後期の集落跡を調査した。その他、調査区内で縄文時代と古代の遺物が出土している。

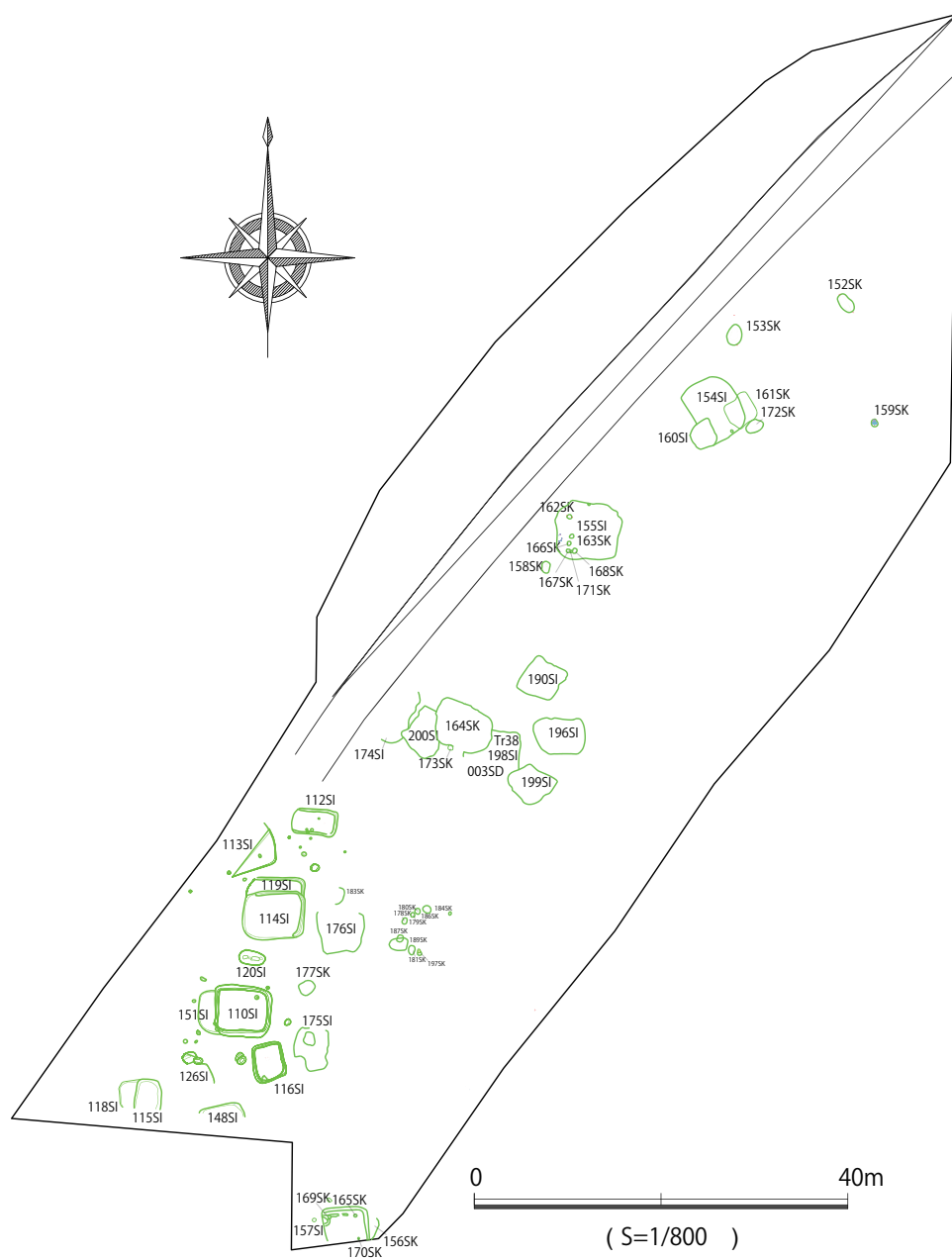


遺跡全体図 (S=1/1000)



花の木古墳群全体図

- 2 号 墳** 一辺約20m、高さ約2.5mの方墳で葺石や埴輪はない。周溝の規模は幅約4.5m、深さ約0.7mである。過去の調査で埋葬施設は南北を主軸方向とする3基の木棺が確認されていたが、西側の木棺については、墓坑が掘り込まれていることが判明した。西側の木棺は他の2基の木棺の設置と墳丘の構築後に埋葬されたと考えられる。また、掘り込まれた墓壇の南は開口しており、扁平な石が敷かれていた。今回の発掘調査は過去の調査の排土中から若干の鉄製品が出土したのみであるが、既に判明している副葬品の内容から2号墳の築造時期は古墳時代前期末から中期前半と思われる。
- 3 号 墳** 一辺約19m、高さ約1.7mの方墳で葺石や埴輪はない。周溝の規模は幅約4m、深さ約0.7mである。埋葬施設は墳丘中央に南北を主軸方向とする2基の木棺とその北側に東西を主軸方向とする1基の木棺が直葬されていた。2号墳と同様、埋葬施設の南側は開口している。西側の木棺には鉄製刀子が2点副葬されていた。副葬品と周囲の古墳の状況から築造時期は古墳時代前期後半から中期前半と思われる。
- 5 号 墳** 一辺約10m、高さ約0.7mの方墳で葺石や埴輪はない。周溝は幅約3m、深さ0.4mである。周溝の南東隅の底面で墳丘に供えられていたと思われる古墳時代前期後半の高杯が出土した。埋葬施設は木棺直葬で北東から南西方向を長軸とする。築造時期は出土した土器から古墳時代前期後半と思われる。
- 6 号 墳** 一辺約11m、高さ約0.9mの方墳で葺石や埴輪はない。周溝は幅約3m、深さ約0.7mである。南溝底面付近で墳丘から転落したと思われる土師器の壺が出土している。埋葬施設は北東から南西方向を長軸とする木棺が直葬されていた。築造時期は出土土器から古墳時代前期後半と思われる。
- 7 号 墳** 一辺約14m、高さ0.8mの方墳で葺石や埴輪はない。周溝の規模は幅約3m、深さ0.7mである。墳丘東側斜面では滑石製玉類がまとまって出土した。内訳は勾玉14点、棗玉11点、管玉1点、白玉約80点である。埋葬施設は墳丘北側に片寄った位置に東西を主軸方向とする木棺2基が併設されていた。墓壇の西側は開口している。埋葬施設には鉄製品、瑪瑙製と翡翠製の勾玉が副葬されている。鉄製品は2基とも武器類と農工具類である。瑪瑙製勾玉は北側の木棺の内外にそれぞれ1点ずつ、翡翠製勾玉は木棺の中に置かれていた。古墳の築造時期は滑石製玉類や副葬品の内容から古墳時代中期前半と思われる。
- 弥生時代中期から後期の遺構** 弥生時代中期から後期にかけての集落が確認された。弥生時代中期の竪穴建物は、平面形態が小判形で規模は長軸4m、短軸3mである。炉は地床炉である。弥生時代後期は竪穴建物約20棟と数十基の土坑を検出している。遺構は平坦地である古墳群の周辺を中心に谷へ落ち込んでいく緩斜面地まで広く分布している。竪穴建物の平面形態は隅丸方形が主体で、規模は最大のものが約6m四方、最小のものは長軸約5m短軸3mである。炉は地床炉で一部埋石を伴うものもある。多くの竪穴建物の壁沿いには一部ないし全周する壁溝がある。支柱穴は不明瞭なものが多い。一部には馬蹄形遺構を伴うものがある。焼失住居も多く確認されている。出土遺物は土器は壺・甕・高杯が主で、石器・石製品は磨製石鏃、磨製石斧、打製石斧、石錘、磨製石剣などが出土している。



花の木遺跡全体図

調査区内 調査区の広い範囲で石器が出土している。原位置ではない可能性が高い。出土した石器は石鏃、石匙、削器、石錐、打製石斧、磨製石斧などである。乳棒状石斧などの縄文時代後期で出土する石器が出土しているため、石器群の縄文時代後期を主体とすると思われる。石器石材は黒曜石と凝灰岩を主体としている。

まとめ 今回の発掘調査で花の木古墳群は古墳時代前期後半から中期前半に築造されたことが判明した。2号墳・3号墳は古墳の構築過程を理解できる良好な調査例となるだろう。7号墳に副葬されていた豊富な鉄製品群は古墳時代中期前半の副葬品の配置や組成を知る上で好例と言える。また、7号墳東斜面で出土した滑石製玉類は墳丘上祭祀に伴うものと思われ、埋葬儀礼を復元できる好例である。

花の木遺跡は出土遺物から弥生時代中期後半から後期にかけての集落であることがわかった。良好に遺構・遺物が確認され、西原台地周辺の遺跡群の実態を知ることができる良い事例になるであろう。また遺物は土器を中心として石器や石製品の出土もあり、当時の生活を復元する上で良い調査例と言える。

(早野浩二)



2号墳埋葬施設周辺状況



3号墳埋葬施設検出状況



5号墳埋葬施設検出状況



6号墳埋葬施設検出状況



7号墳埋葬施設検出状況



114SI・119SI 完掘状況



110SI・151SI 完掘状況



157SI 内馬蹄形遺構検出状況